風雨晦冥

本間文庫

美妙著

本間文庫
文庫 14
A 69

本學文庫

文庫14
A69

風雨晦冥

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

い殺しと、何の何殿、義経、弁慶との話とか、形容上、年の後世に詩さ
れて、何の死んでる時、知る知らぬ、
長、八幡太郎成功して、疱瘡と諸共に敷上げて、貴下て
仕舞へ、小判四の猿面冠者が横合ひから、小股をすくいて威張
り過ぎて力負けし、三河国の豪傑
の十五代、足利尊氏、又二十方の綾川と、名ふして何
さ為たるもの。何すると、
有の、末つ子だけに智恵の付いたこの、覇業、後世に及んで
毒虫の長く、頼朝の縦横、兄は高慢、弟に負けて、足利
ぶ史に角無理冥路でるナ、上に憚ぶ付けると、
一言いるる、感じる、

れて、是七大頭の以両人、面白や足の力とまれだ、全く天下
駒鹿でもの、自然の性質よく、ゆるゆる撞着せば、衝動せば
黒白と溜尾を松ぬ、しての時極の強極にかつて、見る間も
ニつ三つ、まる進るし、迂に東山あるとして吹き流るもこそ！
天下の大定へば、つ
花にしく、故用く暮る釣の紅葉、大代の香を吹く黄菊白菊、
ちと京洛で秋に一点の俄の限、何処の馬肩の知れぬ元寇長陣の東枕髪、
儘に為てる、半風を昨ら今は浮衣美食、極とのいろ
さん奢りて梳ぶての高ぶ、飯の上の蝿、空に寄る蜻
京名の繁華に此処で儲け叶と詰ろう、入り込む、出処あり

い美人の群、それに引き掛けて無け無けの配一夜の中に空と飛ぶせ、野たれ力で剃り髭の剃り痕阿嬉に見えるまぬそれは其夜の紀念とばかりて、つるつると撫ぜる気枝けしてくれ、やっぱれ立ち優りる部軍に彩色あるものもあれば、一夜にしてもに立ちたばこ、一夜だけの花嫁たいけな白魚の織物に、仙の生意気な沙汰、中の皆皮其夜のけとふ肩と揉みもて「肩癖でおちやるふ」とは野糸張りたいい草。一里十三の敵陣恒慶演ロといふ日の日に眺める

かとふ切る目付き、巣ぶの土塁を曲げて掛けて、目を細くして女をふぐるに早く進んで、涼世の五十年、人間の生命といふ

も、甚敷、脆い、まる脆くしもあるかゆるふ生命とのいふものが此村に限りて変でるの。

ひとりぼっちで無く、多くの何の何某、金生物づあのたちかも風位の身分でも同じく柔行ふ遊び敷と

て、雪て凍るものの歌とふ、それも意外ふ味を貰えて「悲しき」や「寂しき」きしで歌痛持ちの配下を恒よ

血みどろの陣幕にかえに変りて軍看帳とと為れば、血腥

考ふるの暴の無ふる、髭武者の袖の伽羅の可合さく顯ぎ貰

えて、美人に寄りかかれて天下の大事の掛

しもぐて是、そんなに硫黄は行けば、高れ藤彦八野幕

と名を代へ、石成て吾と呼ばれて、宴席よ名舞の武

しいとふるまは茶つぼとい
ふ子が寝ぼけまなこして、恩賞の味の
話定所でも晩夕気の目蓋重く、時早甲冑役と欠伸を噛ふ
ごとの惚気三昧、百貫の土地、人に遣るまは自ら取り
たし、目ろぶ取りて買ふ取人を呼ばして遣りて、其の[illegible]
た紅の恋に笑靨を出さもてなしてこそ、何の推兵ぶ[illegible]
ど、[illegible]百でも拾いまはりて居たるに、まづ恩賞ぶ此方にな
はるぬとは当の好じまる、其をもて乗るなと頭国を縮せば、
一時と非理も理とりて、それぶけに知るは皇乱る掛る。
下人ばらの情無き、一圏に此侵怙を禁裏の泥たとも男
ば、故憂の気まは憤怒の情の勝りて、哀れ国賞を叱咤する
大家[illegible]知たれら、怪気に乗りて就又して、此恨をうつて

呉れやるものをと思ふの世渡義。 既の怒も集れば宿で、地
下のぶるくもし流石敵よに 安える、それぶの一方
はぶ[illegible]賊が 自西は[illegible]上の常の癖とて耳にも歩ば、耳にとる
ぶ藤房が苦労性と渋[illegible]ふ。

うるの陰りて、いる物哀れふ秋の雨、今日は久しぶりで
晴れて、[illegible]紀まるで冷き西に[illegible]
の村萩し泣き敵ふ[illegible]て、[illegible]
麓も取れて一帯の紅、紅葉の色目しまば由く、漫ろ歩きは
屋敷といふ[illegible]の下晴、夕陽に乗の影を長く引いて、睦く
呼しみぶる角屋敷の横ぶ[illegible]て来る二人の雑兵ぶ有る。
軍は冷はいぶれも似ぶ[illegible]の[illegible]、戦場を経る記録の、一人

は[illegible]で、[illegible]ら血気の人物、物語る音聲、[illegible]ハ錆で[illegible]て、高笑ひ、[illegible]人は[illegible]、一人は[illegible]音で相鎗[illegible]色し小白くて愛敬たっぷり、人形食れの被衣連のはちやかやと言ひ[illegible]、何し[illegible]は[illegible]、素はだ[illegible]て[illegible]彼一句題一句、人に聞のれて[illegible]播[illegible]、聲のたい言が[illegible]、天下ふ[illegible]。

「さもさうだ、さ[illegible]。

いんでや[illegible]推もである[illegible]。

ぶ！　生あるもい面して片腕[illegible]、評定[illegible]。

何[illegible]。

生あるもい面して片腕[illegible]、評定[illegible]。

[illegible]

[illegible]非評定[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]此刀食はせられる用心[illegible]噛ぢやてしと言ひ[illegible]、[illegible]の[illegible]

[illegible]細[illegible]は[illegible]高[illegible]に、一方[illegible]笑[illegible]に[illegible]、[illegible]、[illegible]寶[illegible]動[illegible][illegible]さよ。

[illegible]、[illegible]知れ、[illegible]し[illegible]いと[illegible]口[illegible]

[illegible]だけに[illegible]高[illegible]て、[illegible]冷[illegible]文句、聞げで聞く

て[illegible]満々、[illegible]、[illegible]に[illegible]小唄[illegible]時[illegible]と

「血しぶき[illegible]

血[illegible]

たちたちし[illegible]

[illegible]

阿[illegible]羅[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

来いよ、つけるぞ

一たん かざせ！

聴ざる！

寄手あげかの、口おしそうに聞き居る。誰い陰まちば、おのづから矢を揃ふ

小坂殿の家来、思ひ知れ、吾知らぬ佩刀あき

へ抜き放して、発矢とばかり、掛け声道傍の立木を片

手にかつぎ、ニヤ〳〵。それにさて似ぬ奴の内、無

残や刀は軽く食はれて、動かず、をつさに又高ぶ

やうやくの事でやぎ放して、振りまはして行く塚の無き最

前、そうして後ろの同じく歩いて来る人ばかりの是も雑兵

始終の様子を見て坐ったとそうく、一両人これ初めて同じく

高知しる合せ申す。

始めて心付いて、前の二人ほたちを後ちを人うつり、

しけ〳〵と思ひを明めて、言葉を掛けた。

つは身たちは何処でおぢやる。の？

言葉外の帰さでおぢ

やるものの」

打ち解け、詞軽く

つけもやつた〳〵、詞宝外の帰さでおぢやる。

頃出ぞ来れば、鎌倉方の合戦は

一人で能くつ揚げる話々たちを神の一ちやと言ひ

で遣れまるとつれあい沙たちやの。少なくし黄金い

の首一つ一枚でと宝あてし、嘲い、六枚七枚八枚ぐいし

のもの。

世は末ぢや、詮無うおぢやる。

休戦を共にされは懐の[illegible]、前の雑兵し身を入うたるも、
同じ大意の段を聞くとそれば、いよ〳〵双方の話の種は尽き
ずとても黙ては天の[illegible]し立るなり、何ぞ世の通例是非
も無いと、彼れに[illegible]し言ふもそれ[illegible]は男は物語り[illegible]
に僅人で誰か一議のしようもなく移り[illegible]
前の二人の和兵ハ北陽の舊出し奥州武士で、後の[illegible]人は新
田方との仲しのなれの地位について、何れも甚く[illegible]満
で[illegible]。今は[illegible]で反議をしてこの天晴名[illegible]有り四[illegible]
有り、成功の望みの有るものは誰でも[illegible]一人の[illegible]
で、[illegible]の話論[illegible]北畠親房は[illegible]
忠誠で有るの歴々だけ、[illegible]は[illegible]だけ目方の軽、義貞ハ

行[illegible]の男同の方、[illegible]は遣[illegible]の意地の要[illegible]、正成
ハ直で[illegible]するかの地[illegible]、[illegible]て誰[illegible]
まるのは、後の[illegible]人の中の一人が冷笑して、[illegible]
新仕て[illegible]。方々は[illegible]利を知らぬ。
の軍、頭人[illegible]〳〵言ふ[illegible]。
義貞[illegible]ものでは無く、番量[illegible]は迎[illegible]
聲[illegible]相[illegible]るが帰する[illegible]、大抵名
と両[illegible]を張[illegible]日[illegible]前ば、[illegible]
て吹き吹[illegible]りので無いと理を割て設[illegible]て見れば、何さ
も一理の道理は有り、[illegible]
気になるは如何[illegible]て言はるる事実ハ有り、面白い

ふと、ものと評論を聞きうるにしたがって勧めて最よ百事を馴染んだ独見、前の雑兵は後の人を賢なる許に誘いかける。

前の二人の雑兵に誘て行く

奥殿の密使（上）

又さるのに、それて後の二人の雑兵に甚だまで行くに腕を解して、回もの所をおご見せるばかり、感に堪へて前の雑兵も考ふ。

動きかけるの四人の雑兵の言葉に、重ねて出る人物で、腕の有るもの、無の有るもの、甚だは言はあるとしてもたのしたといふ二人の特の長技であって、此段、ふ言

たりは今日は勇敢たらんの、お成だらんが、心配は無けれども事ごとの、徳の有れこそ攻城野戦五尾ちゃんに近く奔走る身、人持て来ての約束は厚遇優待を受けるとの事、それに優るかは無し、世得の士を受けるといふ処にあるとの事だ、まる今が今理化窮変を朝廷に拒まれて出て帰して帰り、天道き、憐れ石に水、油に火、一も二も無く感心やらん。

文は見える内ではて宿所前の天は目くたちの海まで来ることとて陣間一南なるうなたいうと頼りに勧め無駄の。

後の人は傾の仔細のことを以て心得ける、中志しく、天下の事、定はは豊日に暮れ事、定

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

其処を一本鐙目ざして来て、軍の如く相手を見付けて、それとなく自分の製造のうまれ、しこうして白ロシヤ現在の直弟子の直に為て見たちの番号の好きを嘗て、彼の鐙は早く[illegible]の胸を嘗めて、陣酒一献とまですめられて、やがて自分も神社のうちに入りたの見るわが心配、幸に前の二人のとの心付れるのはたち新を物の、聞へ行けば安心の出来るものと無くて中より見切△

[illegible]

さるに主従の間柄、一同様に[illegible]と一目見るけの付[illegible]、[illegible]、[illegible]、主人足柔[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

時[illegible]は何[illegible]

[illegible]それ[illegible]

出[illegible]す、[illegible]角[illegible]

[illegible]

て[illegible]

きはて[illegible]木の枝草の葉[illegible]揃[illegible]

の[illegible]

[illegible]月[illegible]

[illegible]人[illegible]無く、[illegible]情[illegible]

[illegible]計りに[illegible]

[illegible]人は立ち並んで歩く、歩きそ[illegible]

[illegible]見の中[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]に第宅の裏門、無離で思ひ歩きをする
[illegible]流石それでも一安心、まづしばらく寛いで仕舞ひて行け
と勧められて、直義も同意し、[illegible]二人連れだつて、[illegible]
[illegible]を融かして大ぐらうまい、無離る異くの[illegible]
たの異書陵宣[illegible]品二人、近習[illegible]さんと直ざけて、[illegible]
いるのは働る天の誘屈[illegible]
てふくり[illegible]屈[illegible]
安心といふの様、二人膳をつき合はせて、密話ぶりに
[illegible]やがて[illegible]。
[illegible]の[illegible]に立ちもどれば、[illegible]
の言葉に天の[illegible]の癖で直義

[illegible]
[illegible]と言ふ[illegible]言葉、甚言葉は一言二
言の[illegible]直義[illegible]
[illegible]
[illegible]の言葉とは形を変へて、小刀細工をするのの好きまで、即
ち直義の生涯はかの細工で埋まりきたる。心の秘密に行き
[illegible]の[illegible]、何と開[illegible]物の形を知るに於て
[illegible]
[illegible]
[illegible]

あげると言ふ事が、まづ仕事の一部分。

人の秘蔵の品を、きまつて始めて改変にかゝる、すると直義の目に掛けるの最初、左右に存ずる所の八方ふさがりを、ちらつと横目に見たるあとに、馬鹿律儀にて、野暮をたてゝ、あせつてやぶれ、詰りこのしいつの生命に成りてやぶれる、そこへ直義自身の名乗りまつ[illegible]自分と比べて見る、此処はどこで、彼には五ぶ、やれどこだ、やれどこだと詰る如き相手を大敵は君もだけで。雪で[illegible]の感を安堵に心に恨みくなり、面白の出。[illegible]帰途に就いたが、一度逢つてだけで甚だ[illegible]とまつ[illegible]ふ[illegible]と言ひ、怪んで尊に問ひ

ると、せつく笑ひて、たゞ一人の君に君の逆鱗、馬鹿律義の雛形だけに此世に生れて来る人間は、ものの言葉、さらぬ足し一言の中に籠れ果て、[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

そのうち、双方一歩二歩づつ近寄り合ふうち、この一つ事ぶつ出来るし、言ひ合はせたやうに取っての格色で、たゞ、むしろ、そのあなたあちらと差繰、ぶつかりあひて、はてはあい中和を保ってどうかうかうかうと、人を解きわけ、てしまひ、人交取りの理りは通じに屬する人交は、やはりうまくいかぬ、たゞ、のりつも働いて自身にこれあるべし得ぬ、拘骨ばかりして磨に取ってもつまり、ハ、やはりのとそれる為てしまふ、実ふ為ふ緒目でしまふ。

ふしこと歓楽とて天性自らお働らく人気は先張り永劫見るに屬る

たんや

ばかり言ひて居れば、ふうとう慶間暫越の心張記だ、一意足利と、ふ家を興れる事に為しが、はち知らぬ、の間る組ーて兄と相対ーて一方うえち紅宮に難解とうるの。

空角する見に夜も有、更けて奥書院に人話も絶えて、おのづしの音のみ聞える最中、宵の間の狂言のまつぶき、兄早蕨と駄あてのしいそ新し、あ天知らぬ人まぶ知らぬ、日を野ぬぶするの寄、毒殺ご目を見張ってちはれ一雨降れと待つ蕨枯、——

ゆえには御用つぶの、何の恐るしく無い世の中の紅粉に眩へて蕨尋し、一般の人の心の歌に再乱を

だれ男でもある天も、こゝに今でも事の起れば、それも男と
して天下は定まる。赤心こゝに言ばー今は言もふも
以前のこゝ——此度の大事は
の、斯のくらふ[illegible]の之系[illegible]の柄の有った
で苦を問ふて、はぐ独で功名を言ふ[illegible]
賜湯として内裏の屋敷に辺、柳屋のあるこゝ手ちまの、[illegible]
人の手に大敷を叩うもて、どうだふこゝを結果を待てば、譯
ル無いので部々之系の筆[illegible]！多くい、[illegible]いて悪く云
ふ。些ものなるまぎる筋でもあるの理屈を言ばそんなの
の。何のつもりしくもの当世。今ものれ名人ぶ[illegible]
に誘そふふ、そふる黙って着る武[illegible]と[illegible]で面し、愚同の

寿員、馬庫の直の百成、生今[illegible]の親房、ど
れも[illegible]の[illegible]の世[illegible]る大度量の人物で無いのを。
大度量で無いとハ言い過ぎたるこゝと[illegible]ふ様子[illegible]口を挟め
ば、せこふ笑の些[illegible]し情まで、まゝこの度量はもつの、[illegible]
々のこれらの密謀、いくふの様子でしるこゝ[illegible]ふ
ぶに居れだ[illegible]を平気で居る。其こふのの[illegible]ン[illegible]やりで宇成の
風ぶつとまらこの！

けれど、さゝ言ふ、烟りふいの外ま一人なぞは無い
の、とふ[illegible]問題せこの言葉を出して、さも解ケと言はぬ計り
に誘ひ込めば、それ[illegible]疑ひ[illegible]とふ[illegible]。それハ
此こふと知らこる、ほの大[illegible]宮の[illegible]人[illegible]の些[illegible]と[illegible]

けれど、遠に七夕祭とてのあるなれば、それぶ〳〵と二声三声鳴て来て目もやゝ涙ぐむ、そは古先生の
にしけ〳〵明めて、いくさの古ちぶは故郷の気味、仰山な仲
り世の高が覚一方の一句のうたにゆまつぶし
て、昭なちいて、喃、こゝのこゝ

不四

天を刺たる木、一事に間を出て物で無し、山を砕き、
海を覆す大逆乱は立ち古の評判で出来る物で無し、逆

不四

天を刺たる木は一朝の雨霧で出来る物で無し、山を砕き、
海を覆す大逆乱は立ち古の評判で出来るものでなし、逆
乱の若輩は秋に吹く風で吹き出す春風心まで吹ぬ、
世の中に一朝にして山の紅葉が桜とのはれば、浮れ立つ人心、
ハテ手ぶらしく、ハテの合ひ、いとふ、憂苦の気でのがしたいて、無理や
風流を知らぬ田舎武士、佞奇の士ふ猿、表裏、名誉自補と
呼れ、ふぐる馬ぶるは、裏の若殿、黒洲騒で住ふの、三歳
野で住ふのと、猿の道すがら騒ぎ、今にての比較三時、
黙ては呼ぶ、桜にそれをもて駆ぶで、花を折して大笑吟、
それを春手のしるべと言へば、ふ、時も無い春の俳まつ。

「知るべしとは雪ぐべし」、花に嫌はれても怖ぢぬ猛真似、身に大袖でゐあで着飾りて歩きたさ、同じく無風流党、若駒に乗りて、黒雲りする仕たせる一群れ、有で風も切るとはあるの、花に寄るの威張りに寄るの、任置き我物顔行して大良の一群れの人野はら人ばの、主人そこそこるの両人に乗に家来隷ぶ人、しのぶれも駒でーと。

手の脇に三、薄緑の特産に茅草の地紋大きく白いも、白銀の大ぢを同じて、桜の弾きで御出なさげる桃花色の馬の鬣の流風るるは、渡るたせて居るた。

一体手の脇世巳五、

農村葉ぶしい特産に、同じく大ぢは白銀づくり、馬の泛まるるるどいつしるる螺鈿の里鞍に乗る射して栗毛の馬に駕して居ぢ。

新宮の里、とて一目に素性それと知れる、しづれ武るる出で人物、鐙の肩ぢの腕にても居ぢの長袖るは一向に得よとふ有様、皆和し曲げて帯も解れ、手綱さごまの凄とするは仕ても仕つるぬ身のみだ仕ぶ家隷ぶも酒に酔ひて、四辺のけぬ放言漫笑、まで何も新ぶ立柳と嫌ひて見ぬも一知ぶと、根ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、左ぶ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]、何の一条久[illegible]の[illegible]の[illegible]の

時の無、性質とて、その名はうの事ゆゑ、屈して所謂同病
相憐れと、[illegible]、多くれと、[illegible]
そばの、[illegible]、[illegible]
ご[illegible]すると言葉でゝ、[illegible]
不時の[illegible]、すはや直義の[illegible]
せて胸[illegible]、それ何[illegible]言聞[illegible]
て滅[illegible]てし、[illegible]生きの胡麻化しぐ
ふでつゆそれと[illegible]、[illegible]無、[illegible]漫の出さ[illegible]
ふ、体裁のいゝ[illegible]便[illegible]無く、[illegible]
て、なゞ〳〵とて[illegible]
はる。[illegible]

の身[illegible]し体裁[illegible]、[illegible]
て、はや[illegible]〳〵と[illegible]
目[illegible]、はゞ[illegible]
むやみに[illegible]
許[illegible]生命は[illegible]
空漠[illegible]問[illegible]
と、[illegible]直義は[illegible]
くだ[illegible]

五

時と場合を考へて、何の脆い命を惜しみ、寸と時も据ゑて置くべきか、聞き直義し微笑を含む、

「今でも主君の仇とあらばさふさふ未練がましい命惜しまぬ。」

「今でも主君の仇とあらばさふさふ未練がましい命惜しまぬ。」

「詰まるところ、[illegible]人で[illegible]無い。」

「[illegible]、命惜しむ。」

と知らるるものの、惜しまぬと聞くと、[illegible]。

「[illegible]人の命を[illegible]。」

「[illegible]無いとは言はぬ。命を惜しまず[illegible]」

[illegible]。

[illegible]と推察し、[illegible]て砕けるまでは男の心に未練は有りたが、[illegible]は仕方無い無念の相を浮べ、水、今更悔んでも甲斐無い、[illegible]様に死ぬくやしさ、たゞし詰まるところ[illegible]

「[illegible]」

「[illegible]」

「[illegible]」

[illegible]より[illegible]の[illegible]、人の命を取るとは何の事、しかも[illegible]其人誰なのか、上の[illegible]が[illegible]極めて[illegible]言葉のしめでは無いのか、なるほど[illegible]何者を解れしかして目ざとくみあげとて、[illegible]の言葉も得心えぬ、[illegible]の[illegible]に[illegible]とは[illegible]の、[illegible]とて言し解く詞なの[illegible]には手をかけ[illegible]示[illegible]いるを[illegible]の？　そは[illegible]の過ちして此如く手ぶまでもあれと[illegible]て知れ[illegible]と思って居[illegible]言い解く言葉も[illegible]いに[illegible]詰りの心ざまの切ふさ手ひとくるべしのをと故き[illegible]に嘆きまで味べよ[illegible]未練ぶるかとうとう[illegible]死ね！

[illegible]とも言ふべき[illegible]の[illegible]のあるのつ」

[illegible]の[illegible]も[illegible]、[illegible]に[illegible]めたしらあ[illegible]て、

[illegible]穴つもりの[illegible]、心[illegible]、[illegible]、[illegible]くるむ[illegible]の裏の無言。男ばの過ぎた言葉も無し、表[illegible]は[illegible]の笑ひの[illegible]の[illegible]は[illegible]情無し、と云ひて[illegible]は云[illegible]、直[illegible]の言ふ言葉に一々道理[illegible]有るのを[illegible]の[illegible]、

「[illegible]得て[illegible]ふ！」

きつぱりと唯一句、すぐに[illegible]みはなす切り込む、

「[illegible]心得たは[illegible]、とうとう[illegible]……」

「[illegible]ふ！　退きもしせずに直死ぬ[illegible]」

「[illegible]で[illegible]ぢやるのつ」　と[illegible]春を[illegible]せば、

「情けにはたらで[illegible]ふ[illegible]せてくれる。」

「[illegible]は[illegible]服[illegible]ぐ！」

紺谷

ついに言ふまじと思ひしものの、行末を思ふに、事を知らぬ前の手柄に変ずべきこと、ここの床板、其許の無に浮かしてくれつるものを。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

て、まで張られては堪らぬ。[illegible]の[illegible]を辛くし
[illegible]んでもあの[illegible]をみを組の[illegible]
だに安堵[illegible]体[illegible]さ[illegible]拾いて近づくと呼ぶ、呼ばれて[illegible]
時で進んで、いのちも無く見上げる目、見ぬ[illegible]ぬ[illegible]の[illegible]は
いつの[illegible]、直義の目はいつの[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]の一杯、こ
ハテと驚く[illegible]をえて、きらと涙を奉じぬぐいて、
「直義、生命しがたきぞ[illegible]」
「直義、生命しがたきぞ[illegible]」と二度ずつまで言葉を
重ねて、「其許たち二人の心底[illegible]」
怪[illegible]、直義の身に[illegible]
ぢゃの。

いそがで事し無き[illegible]ぢゃの。立つのあれど……噂、
これ如何……二人の命を痛けて、二人の申し訳を立たせて
天晴ぶる武士に狗死をさせられまいの、まで居させられまいの、思
ってだに胞を到[illegible]張り。直義この身に陰は無い。涼気
の嬉戯と、云いつつ陽[illegible]しそのれば前[illegible]、今宵御足
ちとしこの今の身になるまでの、[illegible]の[illegible]、其元を[illegible]と言ってほ外では無い、
天地[illegible]の所加護と其許たち武士どもの精勤ぢゃの。
[illegible]者は[illegible]りんごで、且逃し、且頭き、意の極[illegible]
[illegible]説が立つるまでの[illegible]ぢ、「其許たちの精勤思い、そ[illegible]
何でもやみ[illegible]ぢ、其精勤[illegible]、其許たちを——[illegible]何に進
退[illegible]ぢ、いのに此身の離[illegible]ぢ、いとて——たの、

この現在の目前で見て居てあの〳〵と死なせられるのを
うぶこれ〜と
膝を叩いて設きつけて、感動に特に聞こえに深し、声
を殺らずのうにたりて「ワタクシの体無いし口の裡、両人いとし
衝き上げて来る涙、その雫すは五尺の全身を震って、ふと
て、下を向いて口唇を噛む体、右手を押えて、真我のこと
動けぬ〳〵みな
「死なせ、死なせ、死なせられぬ！
てし死なせられぬ！
天地ろうろう
真我の身に引き受けて何ものでし相
てやりたい。
集評たちの腕前では取る。
知てる気に狙撃した罪、ふふはふふを逃れも無
なぶし罪ぢゃと後悔して、動ば

ば、絶まで、狂いけるわ、一念なる其罪に身を中て〳〵真我
の身に触るのの●れる●と抜いて斬ると見えるー〳〵
ワ、〳〵ワ、〳〵奴！それ、天ケるく無くて何ぢゃ、これ！
直我直実胸にして、ものーや其許たちと諸共に死ねだとて斬
許たちのは死なせられぬ。
ぐ。
ようー、これ、こん、心得なの
程までに情ぶ者のの、それ程にか〳〵深く感ぜ
る事が、前くんだ身ぶ取のしくさ居て来れば、いと
気の毒ぶまるかけ。
これ程の恋の苦々、草一本でし
王家の物のは浪籍ごかく
いて、男は此程に情の者
見に涙をさく流させる事に居る

と、富士、我と我が身をつまむいてし遣ったい程
申し話は微塵し無いの。こちらは異度の知れぬ[illegible]に臣下五受
さる主君のた心、それ[illegible]なれ[illegible]なるに[illegible]
「真義、いのちと力[illegible]」[illegible]話は今や死ぬ身の一人
に取って宜年之のよう土産の[illegible]馬前で捨てるのもなる手柄と
の時に地[illegible]し主君のたのに益[illegible]ばし士の一[illegible]は立つと
いうもの、「其許たちのみ死なせられぬ」と拙も何なる[illegible]情の！
てし死なせられぬ」と拙も何なる[illegible]情の！
未練[illegible]、[illegible]は二人の命、そし[illegible]て[illegible]仁義英
俊の主君の難義に無くるるの[illegible]ばかの情[illegible]んでなるいの
の。感涙[illegible]てなるたし利げるのつた口、やうやくに

山と居りて、こうして黒に回る、
「身[illegible]る[illegible]情」と言えばだけの　涙に大風[illegible]
て、
「なるほどのまで[illegible]言葉、[illegible]ばまれるほど身の所甲
悲無子ぶの思い知れて[illegible]発矢！何なる不肖の身ども！と
て[illegible]此上は[illegible]と面を曝して、生き[illegible]て[illegible]
ありますぬと。[illegible]
[illegible]わたくしぬ。」
言いうけるのを主[illegible]直で歩め、「又[illegible]」とたしめて
直義は[illegible]ふりて、
「又[illegible]」[illegible]言し草、それ[illegible]と誰[illegible]望[illegible]し。

「なぜ仕せる。」

「なぜ」とは、なぜ心得ぬ。

「情けにいとしく身を考へて、見上げる炬をきらと眺めて、」

「なるほど、こうばるのは、」

「にて、其許たち、」

「任せめるは、ふぜ言ふたつ、必ず死ぬるとかきに詰しのけの無主動物にて、土地のぶたつと思ふけの、」

「なぜとは、とはふるこやうの、」

「拘ぬるにせ上は情を知つた思やるのに、」

「ちく唱いてもに高は風、胸は青に捏げる、当惑して信同けば、まく、一方は敵ぬけ、」

「なぶ死ぬすぶ敵でば無いる。直我一旦男ふる、生命にけつて小其許たち、」

「なぶやみ、とけふせあと。」

「心ぶはぶ心、酒とて小無いこる直我にまれど近に所た思我、そしてと」

「なぶ体るいと手を掉るのをしけ、ぐと眺めて嘆息、」

「何し、時の運ぶ。」

「運を待つの、運の表ればたれ迫ぶやの歓念」

「運を荷つて立つ心ぶや。」

「運を荷つて立つ心ぶや。」

「運を荷つて立つとふは……」

「運を荷つて立つとふは……」

「不審謂てつぶ同なる。」

「運を荷つて立つ心ぶや。」

「運を荷つて立つとふは……」

「運を荷つて立つとふは……」

「運を荷つて立つ心ぶや。」

「運を荷つて立つ心ぶや。」

「運を荷つて立つ心ぶや。

を一気に飲みて立つのぢやの
聞けど聞けど聞けど聞けど、男はだて天は晴を集め、
「されでたそ銀の馬鹿離義……」
「離義とのりてし行は無い。」
「ち八分ぼせも男ぞ小ぬ、詮ろへ事はちぢやるまい。
事わて聞きせるれじる。まれはらて天の生命……」
「狗死ぢわ。」
「狗死ぢハ全く馬ぢやふぬ、舘の馬鹿無るるれば。」
「又」てて縛るるるふ事なきたる無い。」
「ハ」はたしか病、ふ実る吹るるれん力立つて、はげし
く頭を左右る、

「うるあれば、殿！舘、よ
黙る心なる申さいでは！申さいでは！何故！舘！
ぞ邪言葉を言ては心得ぬ。
「何ぢの？」
「銀の馬鹿と思れ」
「過言ぢの。」
「心得ぬと」
「ぢれが大事と銀は男ぞの。」
「銀！」
「この……この言葉ぢやるの。
の下敵の為に捨てて、
「何ぢ」
「ふ直義ちる」
たまるるるて鬱
千金の中身をるるるる。
天下で破と申するの。
「ぢ」
「ぢ」
「ぢ」

二行前葉へ

退きけるとの当惑、どうしたものか、と身も世もなげ、
有るべき筈、来けるは驚にして、且つは幻の思い
主君とは[redacted]、それだけに感佩するいとぐ、千思万
感は胸を紅して、未の未の、男心迷いに迷いて未
だうたに知へついたる手段、せめてせしでし主君の身にかいを
うせきけばすう、このぶまことに実の実だ、やっぱり
に涙を揮ひて此上はりっぱ是非も無し、死のとりくは評されば、
なるべしあめ、してけるかるは、両掌を取りてるの一男業、
聞き清きにみるのどうわは紀るぬりり、言いてこをけれ
た甚処と知れば、
「いったいどう詮無」
りそでそれ、両人にはすいは申訳しられ、死るぐ、泣き

ぐ、中有の境」
「と八まる何に」
「世捨人で申ぢやる」

斯うでし無い、

六、

嘘中の嘘、

相手の言葉をはぐらかして、とうとう世話人達の前で詰めまして、内心直毛の思ふ壺にしてその一部始終のあらましを申し上げ、

直毛に当惑して体で有無いづれとも言えず、黙然として下を向いてしろのみ居りましたが、大多和たち両人は同じく黙然として居ました。

「せめて此の時分ばかり許して下さいまし、」

主君を上げて

御身に係累し無きまま……

でもあるし。

思い込んで、ふ面白、何まに何まを無い中の

と祝して直毛に向かって、渡

の二つ二つ、沈思熟考、

にして目をしばたたいて、

「赤ん坊で、甚許たちの

如何にも最も言葉無い、

「お前は、

嘲の」

「まことに是非も無いと思案投げ情」

直毛は身に余る

甚許たちの敵

「御ゆるしで御ちゃって、

二度三度目を押しぬぐひ、

力無きと

を眺め、

「嘲、これ能よく生けの。
[illegible]直義に取りて無念の事ぢや。都合
[illegible]身を[illegible]飛まで[illegible]甚汗たちの心底、いよいよ運を
世に[illegible]る心[illegible]ども、それとて[illegible]けばこそ何ぞ[illegible]
本意無いの知[illegible]や。疑[illegible]る[illegible]、無[illegible]や哀
[illegible]里良に運さ[illegible]る事と[illegible]
[illegible]涙[illegible]の[illegible]、直義[illegible]涙の[illegible]言、「[illegible]
[illegible]の戦[illegible]、嘲、詮無[illegible]と諭[illegible]よ。今は早や其後の事[illegible]
[illegible]直義[illegible]の事に[illegible]き受け[illegible]ば必ず[illegible]
で、勇[illegible]てふ[illegible]でよ。
嘲べうして手伝[illegible]る二人の侍[illegible]を[illegible]て、「[illegible]
餅けに言

ふ事こそなけれ。[illegible]無[illegible]の小ば、しみじみ甚[illegible]たち
を[illegible]の男([illegible])の足[illegible]し[illegible]が[illegible]んぶが、忠[illegible]やのに[illegible]る
と直義[illegible]の[illegible]刑し[illegible]取[illegible]なるうどん、せ
めて[illegible]に一度[illegible]と目[illegible]して後[illegible]を別うて！」
行き直り、二人気取り、二人の全身は取りづたさに唯[illegible]が
[illegible]て[illegible]ふる。[illegible]て涙を拭ひ、それにて
[illegible]男[illegible]の足[illegible]、この欲ではなほ退れぬ、「諍いなと色
[illegible]ば[illegible]て、[illegible]手を取[illegible]ぬ[illegible]に[illegible]て明[illegible]
[illegible]徒を嘲んでなるものの[illegible]の如く今直義[illegible]行くと知[illegible]
自年[illegible]きに立[illegible]て長廊下、廊[illegible]つぶきに[illegible]ます、左[illegible]
[illegible]、[illegible]で西[illegible]の[illegible]て、二人とも直に続

[illegible]、用意して近所を遠ざけさせて、事の趣きを言葉みじかに物語るとふ、打ち解けて打ち解け抜いる有様の何と様を持てなしの、其品[illegible]うち平伏して見上げらしもせばこそ、思ひ取り、且ふ取ぢて、[illegible]に薄く[illegible]て居れば、扨も足乗よく拵いふりの、尊[illegible]は軽く、袖を軽るおるもづて此方へ寄り、鷹[illegible]に一言二言いひて、それ、[illegible]、わ角の武士も出家の門にして仕舞ふのは殺生ふ沙汰と思ひ、しんうちとして[illegible]ます。

一応[illegible]は[illegible]無[illegible]、[illegible]切りて[illegible]歌の注[illegible]る林[illegible]一入加はり、感慨[illegible]、[illegible]物を解く。

運

[illegible]註無、噂、耳我と思案に陥りまし[illegible]聞いて「[illegible]」と[illegible]。

「[illegible]は情[illegible]浮世の道とて甲斐は[illegible]ぢやらぬ。[illegible]。[illegible]ぢやらぬ。[illegible]。[illegible]。[illegible]

元ナテンカ

「それは、天下は安くとろうが、世ぢや、嘩」

中間多きに、枕を高くは知ぬ世ぢや、嘩」

「仰せ泪に、暮れとる秋の、月風ぶき立つても知れぬ世ぢの

「今宵の月の、月風ぶき立つても知れぬ世ぢの

げにや四海浪静かに、のてし武士は暁の、月に掛けすり

よ！　嘩ちと言はば、又其汗たちに帰参して、行くて祈り

北条の餅屋

「知れぬ」

「はは、弱いわ、たまらぬて、直

我が主君、試合は言はぬ」と、胸のやうに、暮るあれば、

知れて変はれば、弱人でも無い、又人でもとるる技

「水鳥の音に驚かれて、平家は富士川で敗れまいる」

「ほゝ、やれ、と、暮れて、

「ゑゝ、ぢやる！　時の間

画に帯して大多和の両人に弘用の金で賜はる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

斯様にいつまでもかいまする。」

「斯わざに言ふのではのいのに、たゞ多れたちはそれ
ゐる時病でもあるのに。」

「つゝぐ、いつぐ即言葉でも定えぬ。」

「大名衆たち、物は知れども、世間の事は知らぬ。
ぜひ如き武士どもは砂の真砂と知ちやるぞ。」

「人を生殺にする言い草、さて大事さに見えつゝ紙でのべ
させて陣用の食物でわざとて取らせ、郷里に郷軍をかつて送
り出して、そして陣でふうと打りぬ、更に物は無い。
さしでも無いと。いろ〳〵の辯はおいやるが、果へて受け
を得ず、しけ〳〵と来ちゐれば、来は何処と思ふ体、

降の事にて言ふて、
「心得ぬ事をいふ人うる。
ふぜひ、何ぞ考へしてくれ。
きて事を聞きまぎれしこと。」

「物は武士でも無いものを、
砂の真砂と知らずば無益
たゞ武士の筋で詰り掛ければ、
「その事で即ちやる。物は武士でも有ふ。ねだん様々
にもてちして詰を行時の出来と為せて、これ〳〵の威徳の程
詰ゐる。まづ実のてもこそふけや、物一
以ての武さるばかりのでは無ちやい。
物の。こゝに此方につけれいてしさるる四位も無き人
こゝ度の事を機会として吉岡ばかりの恩を
報ゆ、詰一飯い

[illegible]で御ぢやる。

[illegible]は[illegible]なけれ、[illegible]は[illegible]

[illegible]の[illegible]事[illegible]の[illegible]の[illegible]を[illegible]

[illegible]を回りて[illegible]

[illegible]の知れぬ同氏なる、全更[illegible]も[illegible]、

「直義、[illegible]角て[illegible]御ぢやし。」と

[illegible]浮[illegible]は、[illegible]は[illegible]。扨[illegible]の[illegible]

[illegible]は[illegible]体、これも[illegible]事[illegible]の[illegible]

「何[illegible]お直義は……」

[illegible]て目を据ゑて、意気[illegible]を[illegible]と[illegible]形相、

「[illegible]事は[illegible]げます。」

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いづれの昼か夜か、真実[illegible]
[illegible]に紛れてきりすの
[illegible]を見の形ばかりに撫で入れ、たゞちに礼服に
改まりて、伸びやかに[illegible]と出でゝ
[illegible]ては、何処とふく朝霧と出でゝ
[illegible]て来れば、[illegible]る近習[illegible]何
如くに[illegible]、秘密にすれば[illegible]事として更
になるべし、再びとの[illegible]後の[illegible]を思いわたして、いづれ何の
子細かいのらんと嘆くわ[illegible]不思議を感
じるのは[illegible]ばかりでなく、事件の疑惑此や疑信[illegible]同じく
[illegible]の眉を寄せるの
[illegible]寄せて[illegible]を[illegible]
[illegible]の[illegible]に限りては[illegible]変ずる[illegible]。
[illegible]何とか
[illegible]、[illegible]

は[illegible]て、[illegible]門[illegible]て[illegible]に用ゐ、目の[illegible]
如くに[illegible]の[illegible]に[illegible]若い近習[illegible]と無く[illegible]
[illegible]ふ、吹き[illegible]
[illegible]て[illegible]
[illegible]、[illegible]
だ不実を[illegible]
[illegible]、[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]、[illegible]
[illegible]に限りては[illegible]
[illegible]て、[illegible]
の名簿を[illegible]て[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]

いよ〳〵わが我だと思ひ、袖ひき、口さがない近隣の者と
てはやされる如く、直子が入来て直戸の訪問を先
ばかりに。
人の気し知らぬ所のしるきぶまを考へると
[illegible]の内に駆て、[illegible]で帰
けば、噂[illegible]人は[illegible]
戸の入口の[illegible]をぶつけ[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

確氷峠の旅情

浅間

「[illegible]」

「[illegible]」

「[illegible]」

京

[illegible]

[illegible]

[illegible]